



第8回

建もの旅日記

—芸術文化の奥深さを実感する街パリ—

(社)日本建築家協会 沖縄支部 幹事
本庄 正之 アトリエ・ノア

一人旅がどうにもでき

月 パリでの出来事



幼い頃から手触りで文化を感じるパリの街角

ない夕チである。それは、いつも同行者を介し感動の尺度を計っていたから、であるような気がする。旅の良さは、写真や本では理解できないその場の空気にあり、非日常の舞台裏を、建ものを通して垣間見るのが旅の楽しさでもある。それ故、私の旅の相方はモノの見方や感動の対象が違う、幼い頃の娘が一番だった。

へ1995年1

子どもの眼から見る建もの文化

ていると、幼稚園児らしき一行と遭遇。先生らしき人物が幼い娘を手招きで呼び、画用紙と鉛筆を渡し一行の列に加えた。その一団は意気揚々と絵画ブースの枠中に消えていった。数十分後、次に会った時には娘も一緒になり実物の絵画や彫刻を至近で寝そべりながら模写していた。ロープを張って入れない日本の美術館では考えられないひとコマであった。



駅舎の面影を残すオルセー美術館

エピソード

ドール朝から終日カルト・オランジュ・ミュージゼを使い美術館巡り。駅舎空間の幻影を残すオルセー美術館の淡い天窗の下、娘の手を引きギーギャンを堪能し

エピソード2 ループ

ル美術館で。「将来遭遇するであろう学校の教科書に出てくるような芸術品は、自分の眼で見て欲しい」という父の願いから、娘はモナリザとミロのピーナスにまじか対面できた。モナリザには等身大で微笑みを返し、ピーナスには「みんなが触るから、あなたのお尻真っ黒ケだよ？」と一言放った。確かにピーナスの尻は薄汚れていた。

後日談・・・3年生になった娘が、学校で教科書に出たピーナスの写真を見つけ「ピーナスのお尻は黒いよ!」「そんなことは無い!」と先生。娘は主張したが聞き入れられなかった。はたして、日本では真の文化が育ち理解されるのはいつの日か・・・

旅先では、建ものその物よりも、そこに棲む人々がどの様に建ものに対峙しているのかという側面を感じ取れるように努めているが、現実の日常でも、臨場感を持ってその建築の意図する深層に触れる様に心掛けたいとあらためて思つこの頃です。
(※掲載写真は著者提供)